

蓑虫山人と青森・黒石市熊沢家旧蔵資料について

太田原慶子¹⁾

Minomushi Sanjin : A Traveling Artist and Cultural Observer in Aomori
OTAHARA Keiko

キーワード：蓑虫山人、青森県、博物館

はじめに

蓑虫山人(みのむし・さんじん: 1836~1900年、本名は土岐源吾、以下蓑虫と記す)⁽²⁾は、幕末から明治中期(19世紀後半)にかけて諸国を放浪し、実体験をもとに、各地の風景や出来事、人々の生活の様子を描いた。美濃国(現在の岐阜県)安八郡の豪農の家に生まれたが、正妻の子でなかったために幼少期から苦労したという。十代半ばに故郷を離れ、二十代の頃は九州地方を周遊した⁽³⁾。四十代、明治10年(1877)頃には岩手県に滞在し、翌11年秋には青森県に入ったとされ、下北・津軽地方におよそ九年間滞在した。

画を描きながら、そして、特技としていた庭造りをしながらの放浪生活であったため、ゆかりの各地には周辺の景勝地を描いた襖絵や屏風絵等があり、滞在先の家々には彼が手がけたとされる庭園もあったという(残念ながら、現在は造園当時の面影を見ることができない場合がほとんどである)。残されている襖絵や屏風絵を見ると、蓑虫が自ら足を運び、自身の眼で確かめた光景を、壮大なスケールで力強く描いたかと思えば、滞在先の人々の家業や趣味、周辺の状況をよく観察し、好みに応じたテーマを旅で得た知見や情報をもとに描いたもので、対象や画風も多様である。

青森市浪岡の旧家平野家に残された「浪岡全景図屏風」は、浪岡という地域の歴史を「視覚的」に確認できるものになっている。風景画として鑑賞できるとともに、史跡や名勝地を一画面の中にとりこんで構成している面白さがある。歴史ある地域のあるべき姿、理想とする光景を、一部想像をまじえながら無理ない構図で描くという、彼の空間認識能力の高さが表れたものである⁽⁴⁾。深浦町黒瀧家に描いた「岩木山之図」をはじめとする諸国の名峰名山を描いた一連の山岳図は、木材問屋として栄えた黒瀧家の家業を意識したものと考えられる⁽⁵⁾。

また、彼が滞在した津軽地方各地では、当時、リンゴ栽培が本格的に始まり、津軽の人々の生活の中に西洋から伝わったリンゴが存在するようになった。新しい出来事に敏感な蓑虫は、それを見逃さなかった。リンゴ栽培の関係者とおぼしき滞在先では、考古遺物である土器を日常の器として用い、リンゴを盛って描いている。古さと新しさを組み合わせて提示し、その土地のもつ歴史と文化、生活そのものを、目の前にいる人と楽しもうとする蓑虫のもの見方や考え方を感ずることができる⁽⁶⁾。

そして、土器や石器、土偶等の考古遺物を出土地や所蔵者名を付しながら、花器や茶器として用いるかのように室内の調度品とともに描いた、現在、本県でしかその存在が確認されていない屏風類がある。こうしたものが描かれた背景には、彼を受け入れ、彼のもたらす情報を吸収して楽しむ人間関係や各地の名士や文化人らとの交流があることを、筆者は指摘してきた⁽⁷⁾。

ここで、当館で過去に開催してきた蓑虫を中心に開催してきた展覧会の概要について、整理しておく。

「蓑虫山人」展(1984年)は、蓑虫という人物の生涯と作品を概観した初めての本格的な展覧会といえる。彼が本県に何を求め、そして本県滞在中で何を求めたのかを、県内に残る作品と終焉の地である名古屋市長母寺の所蔵作品から紹介した。この展覧会開催のために行った県内外での作品所在調査と収集資料研究が、現在の当館における蓑虫研究の土台となっている。

「蓑虫山人と青森」展(2008年)では、蓑虫を本県の近代考古学史上の重要人物と位置づけ、前回以後に確認し、調査を進めて明らかになった作品と作品中に描かれている実物を集めて、考古学的な観点からその業績を整理した。蓑虫が、つがる市亀ヶ岡遺跡の発掘を手がけた先駆的な存在であることはよく知られており、明治期半ばの本県考古学事情を知る上で、その業績は欠くことができない。彼が当時の所有者をこまめに訪ね歩き、実物を見て描いた卷子仕立ての図画集(「陸奥全国神代石井古陶之図」、2008図録76~83頁参照)の存在と滞在先各地での日常の出来事や人々の交流の様子を明るく楽しげに描いた絵日記(「山人写画」、同図録18~70頁参照)等がもつ情報の重要性を考えた⁽⁸⁾。

幕末から明治という激動の時代において、各地の歴史や文化の魅力を知り、それらを地域の人々と共に広めようとした彼の活動は、現代の博物館が目指す役割に通じるものがあるのではないだろうか。近年では、その先駆的な視点に注目し、本県をはじめとするゆかりの各地で、その足跡や活動についての調査が進められ、展覧会が催されている。それらの成果を共有することで、蓑虫の旅の最終目的でありながら、実現することがかなわなかった「六十六庵」(全国を六十六カ国に分け、国ごとに部屋を設けて歴史や文化等を紹介する博物館的な施設)の設立構想がどのようなものであったかを知ることができるのでないか、と期待されている⁽⁹⁾。

蓑虫は自ら見て聞いて確かめたこと、経験したことを文字による記録だけではなく、描いて視覚的に伝えようとした。遺跡の発掘等を通じて収集した古物を整理し、それらを地域の人々と共有しようとした書画会(展示会)の開催は、地域と地域、さらには家業や社会的立場、知識量の異なる様々な人達をつなぎ、また、つながることを自然に促していたであろう。遺跡発掘、資料収集、書画会といった地域の

(1) 青森県立郷土館 学芸主幹(〒030-0802 青森市本町2丁目8-14)

人々を巻き込んだ活動は、関わった人それぞれを刺激し、自分たちの暮らす地域へのまなざしを深化させていったのではなかろうか。

本稿で紹介する熊沢家は、蓑虫が本県に入って比較的早い段階から活動の拠点になったと思われる。蓑虫も深く信頼を寄せていたのだろう。本県滞在中、何度も立ち寄ったようで、彼の県内における活動の集大成ともいべき考古遺物を描いた屏風が残されていた。これは、本県でしか確認されていない五組のうちの一組（六曲一双）で、当初の形態を保つ屏風仕立てのものである（『陸奥全国古陶之図屏風』・『陸奥全国神代石之図屏風』76～77頁参照）。また、これとはまったく異なるタイプの風景画集、津軽半島の海岸風景四十三景を描いた卷子仕立てのものも残されており、それらは、令和4（2022）年度当館に寄贈された。関係資料として、状態はよくないが、黒石山形周辺の名勝地を描いたと思われる六曲小屏風や蓑虫の書簡（71頁参照）も含まれていた。これらは、彼の本県での活動を知る手がかりであり、地域の人々との交流の具体的な状況を示す貴重なものである。本稿では、蓑虫が描き残したものとこの書簡から熊沢家との交流を紹介し、明治期の青森の文化を知る一助としたい。

1 熊沢家と蓑虫

熊沢家は、現在の黒石市下山形地区で代々庄屋を務めた豪農である。当家には、江戸寛政年間から文久年間（18世紀末～19世紀半ば）の年貢収納を記録した庭帳・大福帳や明治初期の地租改正関連帳簿や地券、昭和初期の土地貸付台帳類が大量に保管され、そのうち約500点を当館が現在、整理作業を進めている。蓑虫滞在時の当主は慶次郎（けいじろう：1861～1902年）で、地主として地租改正等の様々な作業に追われるなかで蓑虫との親交を重ねていた状況が分かる。

東奥日報社編『青森県人名大事典』（225頁、1969）によると、慶次郎は明治10年（1887）頃、向学心から数度にわたり上京したといい、早くから政治活動に関心を持ち、同地区の政客として活躍した。また、当家の庭園は、蓑虫が手がけたものといわれている（下写真）。蓑虫が青森を離れた後のことになるが、明治28年（1895）に東京人類学会に入会している。

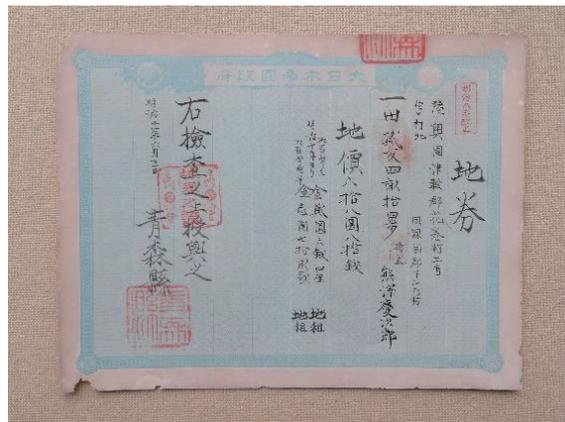
慶次郎の養子である瞭静（りょうせい：1880～1904年）は、北津軽郡鶴田町の須郷助十郎の四男である。村会議員や昭和4年（1929）と同13年（1938）には黒石山形村長も務めた⁽¹⁰⁾。さらに同地区の歴史文化保存活動にも取り組み、昭和3年（1928）には、「山形村先住民族遺物保存会」を結成し、会長も務めている⁽¹¹⁾。

蓑虫と熊沢家（慶次郎）との交流が始まったのはいつからだろうか。「写真」によると、明治17年（1882）前後は黒石周辺を訪れていることが分かっているが（2008図録）、熊沢家にはそれよりも前、本県に入って早い段階に直接訪れ、親交を深めていたのではないかと考えている。遊学のために上京を繰り返していた慶次郎が、帰郷の際に日比谷公園入口近くに文人墨客を同家に誘う立て札を立ててきたため、各地から多くの人が訪れもてなしたという逸話がある。その中の一人が蓑虫だったというのである⁽¹²⁾。

岩手県から一路、本県下北地方を目指したという説とは別に、下北地方に向かう前に、いったん津軽地方に滞在、黒石周辺で過ごしたという可能性も指摘しておきたい。それを窺わせる記述は、戦前に蓑虫の関係者取材してまとめられた蓑虫伝にもある⁽¹³⁾。北津軽郡鶴田村亀寿庵⁽¹⁴⁾の住職は平定学といい、蓑虫とは同郷で幼なじみであったという。そこで、彼を訪ねて鶴田にいったん落ち着き、周辺の豪農の家を渡り歩いた。周辺の豪農の一つに熊沢家が含まれ、この時から三年ほどの間、蓑虫は繰り返し訪れては宿を請い、各地を巡る拠点にしたという。平定学との関係については、詳しいことは分からないが、以上のことを考え合わせると、当主と蓑虫の交流は、おそらく明治11年秋の少し前からの可能性があり、蓑虫がその後の下北地方を含む県内各地での様々な活動の重要な拠点とし、本県を離れるまで、当主の慶次郎は彼のもっとも良き理解者であり続けたと考えられる。

2 慶次郎に宛てた書簡

次に、蓑虫が慶次郎に宛てたと思われる書簡を紹介する（71頁）。本書簡は、新発見となる。本文は次の通りである。



熊沢家で保管されていた地券の一部



蓑虫が手がけたという庭（熊沢家・明治期の様子）

一言拝啓仕り候、向暑之砌 益御清迪 (適)、珍重に存じ奉り候、陳ぶれば、兼て御願いの古物展覧会は雑紙上にて御承知の事とは存じ奉り候えども、去る月二十五日より相い開き候ところ、評判も宜しく、參觀人も多くこれあり、仍ては兼て御預け申し上げ置き候破笠翁 (小川破笠) の脇指も是非陳列仕り度きに付き、今 (昨) 日まで取り入れ候縦覧料金十円御使差し上げ候間、右脇指拝借相い成り候様願ひ奉り候、且つ又残金五円は終会上直ちに御送付仕り候間、右御聞き済まし申し上げ奉り候、「孔雀石、右も同様陳列し世評を博し度候間、御差し支えなくは御出品下され候様申し上げ奉り候、「右申し上ぐる旨、本日使の者差し出し候、尤も出立日暮相い成り候は、一泊御厄介頼み奉り候、万々後礼を遂げ候、勿々頓首、

六月三日 蓑虫拜 (印)

熊澤様 足下

内容をまとめてみると、以下のようになる。

「先月二十五日から開いている古物展覧会は、評判もよく參觀人も多い。については、預けている小川破笠の脇指も是非とも陳列したいので、今日までの縦覧料金十円で拝借することはできないか。残金の五円は終会後に送付したい。孔雀石も同様に陳列し、世間の評判を得たい。差し支えがなければ、出品していただきたい。本日、使いの者を送るが、出発は日暮れになるので、一泊宿を頼みたい。」

この書簡の内容で興味深い点は、「古物展覧会」の様子を蓑虫自身の言葉で報告している点にある。ここでいう「古物展覧会」の開催において、慶次郎の協力、支援があった可能性もどうかをさせる。「雑紙上ニテ御承知ノ事」の「雑紙」とは、新聞と考えられるが、該当する新聞関係記事は確認できていない。

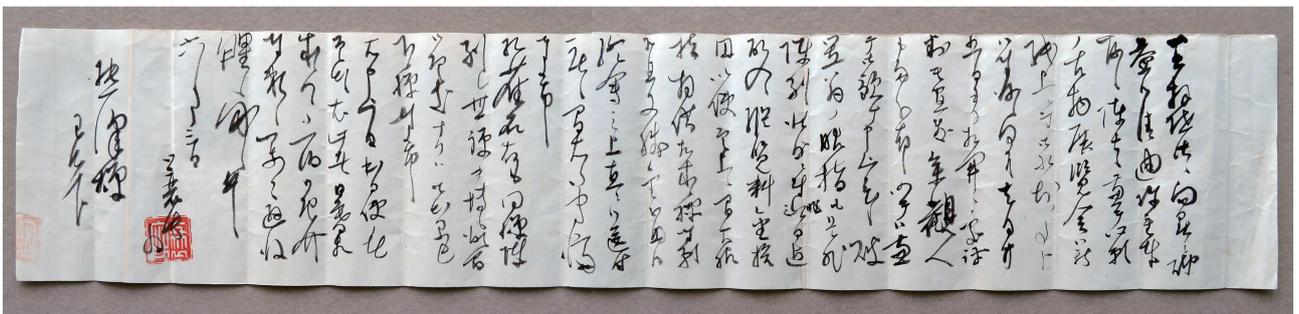
それでは、この展覧会はいつ、どこで開催されたのだろうか。「去る月二十五日より相開き候」との記述と奥付の月日 (六月三日) から五月二十五日から開かれていることがわかるが、年号及び場所に関する記述がない。しかし、場所については、使いの者を差し出すが「出立は日暮れになるので、一泊の世話を願いたい」と同家に依頼していることから考えると、同家近郊、黒石市内または周辺で開催されていた、という仮説は立てることができるかもしれない。

展示品に「破笠翁ノ脇指」や「孔雀石」を加えたいと申し出ていることに注目したい。「破笠翁ノ脇指」は、おそらく蓑虫が熊沢家に預け置いたもの、「孔雀石」は同家所蔵のものということだろう。

「破笠翁」とは、小川破笠のことである⁽¹⁵⁾。蓑虫が破笠細工の収集を来県目的の一つとしていたことは、以前から言われてきたことらしい⁽¹⁶⁾。破笠細工は、非常に高度な技術を駆使した美しい工芸品として江戸後期から全国的に知られ、人気があった。しかし、工芸品として魅力はあるものの、蓑虫が求めたもの、収集対象としてきたものとはややかけ離れた感があり、「六十六庵」で紹介するためというよりは、やはり本県に入る前に県外の誰かに依頼されての目的であって、旅や活動の資金を得るために必要なことだったのではないかと思われる。彼が破笠作の脇指を所有し、自らが主催する「古物展覧会」で展示品としても活用していたことになるが、彼がいつ、どこで、誰から収集したのかはわからず、脇指実物の行方も不明のままである。

また、彼が「孔雀石」に関心を示し、展示品として述べている点は、管見の限り初出である。ここでいう「孔雀石」そのものの大きさや形状を知る手掛かりについては記されておらず、実際に熊沢家が所有保管していたのか実物の所在も不明だ。あれだけこまめに、見たもの聞いたものに加え、その場にいた人々の名前まで細かくメモし記録する蓑虫が、「破笠の脇指」も「孔雀石」についても、描き残していないというのは不思議である。

ちなみに、孔雀石が顔料 (岩絵の具) として利用されることに少し触れておきたい。蓑虫が孔雀石についての知識をどの程度持っていたかはわからないが、これを原料とする青色の群青と緑色の緑青⁽¹⁷⁾は彼が特に好んで用いた色彩に通じるものがある。彼の作品は、墨を基本に群青と代赭の色彩を配したものの、絵の具は当時の子供が使うようなものを独特の調合で使用していたという⁽¹⁸⁾。群青を用いるという点で気になるのは、次に紹介する熊沢家に伝わった卷子仕立ての海岸風景図の存在だ。彼の独創的な色彩感にあふれ、群青の色彩が鮮やかで見応えがある。その技量の確かさ、力強さが発揮された彼の代表作といえる。



蓑虫から慶次郎に宛てた書簡 (縦 19.0 cm、横 95.0 cm)

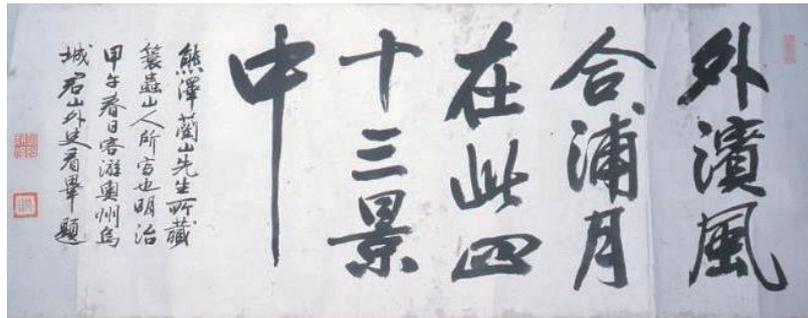
3 津軽半島の海岸風景を描いた「津軽半島海岸風景図」

現在の東津軽郡平内町小湊から青森市、西津軽郡深浦町の大間越海岸までの津軽半島沿いの海岸風景四十三図を卷子仕立てにしたもので、巻頭の表記により「外濱風合浦月在此四十三景中」と呼ばれたりするが、本稿では便宜上、「津軽半島海岸風景図」とする。内容は次の通りで、1 小湊雷電宮之景、2 椿山之景、3 田澤立岩之景、4 大嶋の景、5 鼈甲濱之景、6 平島之景、7 見返之景、8 浅虫之景、9 善知鳥前棧橋之景、10 筑石之景、11 龍鼻之景、12 青湾之景、13 油川之景、14 外濱岬台場之景、15 朱谷之景、16 今別舎利濱之景、17 巖門之景、18 三厩之景、19 燕崎之景、20 七瀧之景、21 小泊之景、22 天然橋之景、23 七里長濱之景、24 鱒ヶ沢之景、25 羅漢岩之景、26 尾崎之景、27 下前之景、28 十三港之景、29 金澤之景、30 大戸瀬之景、31 鳥居崎之景、32 吾妻濱之景、33 深浦之景、34 深浦観音堂之景、35 舩作崎之景、36 岩崎之景、37 巖窟堂之景、38 鸚鵡石之景、39 松神不動瀧之景、40 松神濁川之景、41 白山山之景、42 仙人岩之景、43 大間越之景の全四十三景図である。体裁は紙本彩色、卷子本。各図の寸法は縦31cm、横は図によって異なり、各58～64cm程度。本紙全長は2760cmに及ぶ（全ての図については、当館1999年図録『描かれた青森』、38～52頁参照のこと）。

四十三景のうち、現在の青森市の港付近の光景「青湾之景」は、横寸法がその他の図三枚分相当にあたる178cmにわたって描かれている（76～77頁）。明治前期の津軽半島沿岸の風景、港の様子を蓑虫ならではの視点と力強い筆致で描かれた連作集である。遠くに見える山々には雪が残ることから春の景色と思われる。

巻頭に「外濱風合浦月在此四十三景中」、続けて「熊澤蘭山先生所藏 蓑虫山人所写也 明治甲午春日 客遊奥州烏城 君山外史看畢題」とある。「熊澤蘭山先生」とは慶次郎。「奥州烏城」は黒石。「君山外史」は、落款印章から藤野静輝のことと推定される。藤野静輝については、『黒石市史 資料編Ⅱ』（651頁、1986年）に、明治初期の黒石の豪商として藤野家があるが、藤野静輝と関係があるか不明としている⁽¹⁹⁾。

「明治甲午春日」は、明治27年（1894）で、熊沢家を訪れた藤野静輝と目される人物が、蓑虫の「津軽半島海岸風景図」を見て感銘を受け、「外濱の風合浦の月、此の四十三景中に在り」という画題をつけた。その後、巻頭に藤野による書（画題）を置き、卷子本仕立てにしたともいうが（白雲山荘主人1940）、本紙を張り継ぎ重ねた上に、各景の画題を書き入れたりしている様子も確認できることから、開きながら場面の時間的及び空間的展開を見ることができるといふ卷子本の特性を理解した上で、当初より蓑虫自身が最終的な完成状態としての卷子本という体裁を意識しながら、小湊から深浦まで順番に並べ、美しい海岸風景が続く地理的な特色、津軽半島を巡る旅を視覚的に楽しむという効果をねらって描いたものとも考えられる。作品中に、蓑虫本人かと思われる人物が杖をつきながら海岸を歩き、人々と歓談しながら景色を眺めたりしている姿が描かれている。これもそうした工夫の一つかもしれない。



「津軽半島海岸風景図」巻頭部分

4 陸奥全国神代石之図屏風・陸奥全国古陶之図屏風

蓑虫が、県内で収集、記録した土器や土偶、石器等の考古遺物を、花器や茶器として用いる様を描いたようなユニークな屏風（76～77頁）があるが、こうしたタイプの作品は、本県でのみ見つかっている。現時点では、五組（うち、一組は軸装されている）が確認されている。本稿でとりあげている熊沢家同様に、もとは蓑虫と親交があった家に六曲一双屏風の形態で残されていたものだ。

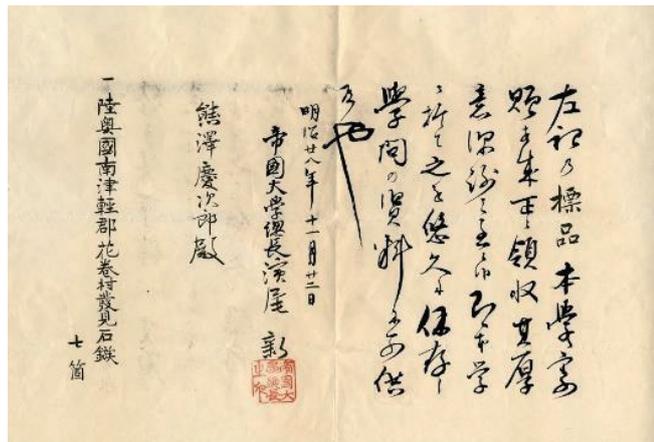
石器や勾玉のように石からできているもので構成されたもの、土器や土偶のように土からできているもので構成されたもの、それぞれ六枚ずつ、併せて十二枚を一双の屏風に仕立てているが、「陸奥全国神代石之図屏風」、「陸奥全国古陶之図屏風」（以下、「神代石之図屏風」、「古陶之図屏風」と表記する）とさらに分類して並べたタイプが本屏風である。それぞれ六枚の組み合わせや並べ方に差があるのは、蓑虫がそれぞれの所有者に宛てたものなのか、所蔵者の側の好みで後に仕立てる際に自由に扱ったのかはわからないが、この「神代石之図屏風」「古陶之図屏風」を見る限り、石器類と土器類をしっかりと区別して並べるといふ蓑虫の明確な考えが表現されているように感じる。

本屏風に描かれた主な遺物、所蔵者を整理したところ（78頁）、遺物数は約105点、所蔵者数は寺院、神社を除いても30名を超える。蓑虫が滞在した当時、県内には、これだけ多くの考古遺物を所蔵し関心の高い人々がいた事実を物語る。他に確認されているものと比較すると描かれている内容及び構図はほぼ同じである⁽²⁰⁾。しかし、他のものとは異なる、考慮すべきことがある。それは、熊沢氏所蔵品が2点描かれていることで、「神代石之図屏風」に石皿が1点、「古陶之図屏風」にも広口壺土器が1点あり、計2点を同氏が所蔵し、それを蓑虫が記録していることだ。いずれも黒石下山形周辺、同氏が管理する地内で出土したのだろう。逆に、土偶（頭部のみのも）等数点が、他では描かれているにも関わらず、ここに描かれていない。意図的に描かなかったのか、気になるところだ。

5 蓑虫以後の慶次郎

蓑虫は、熊沢家に県内における活動の集大成を描いた記録、「津軽半島海岸風景図」、「神代石之図屏風」・「古陶之図屏風」を残した。また、慶次郎と連絡を取り合いながら開いた展覧会もあった。生まれ故郷での「六十六庵」設立という極めて個人的な夢のために、様々な人の元を訪ね歩き、人々を巻き込んだ活動を展開した。その活動は、立場や興味関心、趣味が異なる人達、地域と地域をつないでいった。

慶次郎もそうした刺激を受け、影響を受けた人物の一人かと思われる。彼は、明治28年(1895)12月に東京人類学会に入会した。同家には、彼の入会前後の学会誌が保管されていた(74頁一覽)。入会直前の11月には管理地内(花巻村)で出土した石鏃7点を帝国大学(現在の東京大学)に寄付している(右)。



受取証(縦32.7cm、横46.0cm)

また、佐藤蒔(1852~1944年、日本画家、郷土史や植物学にも詳しい)が、明治22年(1889)の『東京人類学会雑誌』(5巻45号)で報告した「陸奥津軽郡花巻村ヨリ出デタル大甕」には、慶次郎から(花巻村内の)畑地中において直立した状態で見つけた甕を譲られたこと、さらに村内で甕のようなものが見つかったとの知らせを受けた折、慶次郎とともに現地調査に赴いた話等が記載されている。蓑虫が去った後の慶次郎の行動を知ることができる興味深い内容である。

本県を離れた蓑虫と慶次郎の交流が続いたかどうかは分からない。しかし、慶次郎が蒔と行動をともにし、地域の歴史についての知識や情報を共有するために、実物を収集保管し、学術研究活用に資するために提供したりして、個人的な活動に終始するのではなくより広い視野を持ち、守ろうしていたことが明らかになったと思う。蓑虫の考え方が地域の人々に受け継がれ、行動を起こしていた事例とみることができるのではないだろうか。

おわりに

蓑虫が自身の足で現地へ行き、丹念に関係者のもとを訪れて考古遺物等を収集・スケッチして記録を残し、それらをもとに展覧会を開くといった活動は、特定の知識人や文化人だけでなく、関わった様々な人々に、自分たちが住み暮らす土地の歴史や文化への気付きを与え、身の回りの光景や生活の中で失われつつある物事へ眼を向けさせていった。地域のもつ特色や魅力を知り、それらを広く共有しながら守り伝えていくという、現代の博物館の役割につながる視点と考える。

彼が滞在した黒石市下山形の旧家・熊沢家に伝わった「津軽半島海岸図」、「神代石之図屏風」・「古陶之図屏風」、そして、当主の慶次郎に宛てた書簡から、その活動の具体的な様子や親交の内容が明らかになった。さらに、蓑虫が本県を離れた後も、地域の文化や歴史に関心を寄せ、その保存に向け行動を起こしたことが分かった。

書簡で述べられている「古物展覧会」がいつどこで行われ、どのようなものが展示されたのかについて、蓑虫自身が描いて残した記録に相当するものがないか、また、当時の新聞記事等に関係記事がないか、確認・検証を進めたい。

本稿を作成するにあたり、熊沢ちほ子氏、当館ゲストキュレーターの三上幸子氏、同じく本田伸氏にご協力及びご指導いただきました。また、英文タイトルについては、青森大学ソフトウェア情報学部准教授・国際交流センター長の鹿内史氏にご助言いただきました。深く感謝申し上げます。

註

(1) 既出。

(2) 蓑虫山人とは号で、生国である美濃国と、日常道具一切を入れた笈を背負って旅をする自身の姿を、枝先で風に揺れるミノムシに重ねたという。他に、蓑虫、蓑仙人等があるが、本稿では「蓑」「蓑」の表記は原則として原資料に従い、本文では「蓑」とした。また、旅先で収集した資料や描いたものを用いて、全国各地の自然や歴史、人々の生活の様子を紹介する施設「六十六庵」（全国を六十六国とする考えによる）設立を計画していたことから、六十六庵主(人)、三府七十二県庵主(人)等とも名乗った。

(3) 九州地方における蓑虫の足跡と活動については、九州大学附属図書館の山根泰志氏の調査・考証によって明らかになりつつある（『都府楼図巻』と蓑虫山人 同館研究開発室年報 2021 年、「蓑虫山人九州の旅」同、2024 年）。

蓑虫がどのようにして見知らぬ土地の著名人らを訪ね、人々に受け入れられることができたのか、彼の旅の仕方、流儀のようなものを既に九州時代に身につけていたことが分かる。地域の人々に信用されるには、まずその土地で信頼の篤い人物と親交を深め、自らの理解者になってもらい、紹介状を得ること。そうした書面を提示しながら各家を訪ねるという旅の仕方だ。

青森県内では、下沢保躬（1838～1896 年、津軽地方の歴史や文化に造詣が深い学者）の紹介状を手有力者たちを訪ねていたようである。下沢は、自身の俳句や和歌を通じた地域ネットワークのような人間関係を活用し、各人にまず書面で蓑虫の訪問を知らせ、「自身の紹介状を持たせるので」と対応を依頼しているが（「蓑虫仙人書簡と同人が津軽を遊覧すると、ひとまず別るゝ時に与える書及び仙人の絵画」、『閑雲下澤保躬先生を仰ぐ 御遺稿と関係書簡集』所収、1991）、そのような書簡の所在は、現在確認できていない。

(4) 拙稿「新収蔵資料紹介 蓑虫山人筆屏風—浪岡全景図屏風を中心に—」（青森県立郷土館研究紀要第 41 号、2017 年）

(5) 深浦町歴史民俗資料館特別展「黒瀧家所蔵蓑虫山人展」（2019 年）

(6) 77 頁、「古陶之図—」中の浅鉢形土器にリングが盛られているのが確認できる。

(7) 拙稿「蓑虫山人とゆかりの人々」（青森県立郷土館研究紀要第 40 号、2016 年）では、平尾魯仙（国学者・絵師）との交流や奥村準作らとの書画会の開催について、前掲（4）では、浪岡（青森市）風景屏風が描かれた背景・平野清助と関係、「蓑虫山人が夢みた博物館」（同第 45 号、2021 年）では、広沢安任が見た蓑虫の人物像を紹介した。

(8) 当館の主催展覧会としては、特別展「蓑虫山人」（1984 年）、企画展「蓑虫山人と青森」（2008 年）の他に、明治初期の本県の風景や人々の生活を描いた作品を紹介した「描かれた青森」（1999 年）、岩手県立博物館・秋田県立博物館との共催展「描かれた北東北」（2004 年）では、北東北地方を旅した画人の一人として取り上げた。それぞれ図録を刊行している。

(9) 近年のものに、各務原市教育委員会企画展「蓑虫山人各務原を行く～放浪の画人がこの地を訪れたのは」（2022 年）、青森県立美術館「美術館堆肥化計画 2022」（2022 年）、「美術館堆肥化計画 2023+美術館堆肥化宣言」（2023 年）、東京国立近代美術館「ハニワと土偶の近代」（2024 年）等がある。

熊沢家で保管されていた東京人類学雑誌一覧

	巻一 号数	刊行年月	西暦年	備考
1	東京人類学会雑誌／11 巻一 115 号	明治 28 年 10 月	1895	
2	東京人類学会雑誌／11 巻一 116 号	明治 28 年 11 月	1895	
3	東京人類学会雑誌／11 巻一 117 号	明治 28 年 12 月	1895	熊沢慶次郎入会者として記載あり
4	東京人類学会雑誌／11 巻一 118 号	明治 29 年 1 月	1896	
5	東京人類学会雑誌／11 巻一 119 号	明治 29 年 2 月	1896	
6	東京人類学会雑誌／11 巻一 120 号	明治 29 年 3 月	1896	
7	東京人類学会雑誌／11 巻一 121 号	明治 29 年 4 月	1896	
8	東京人類学会雑誌／11 巻一 122 号	明治 29 年 5 月	1896	
9	東京人類学会雑誌／11 巻一 123 号	明治 29 年 6 月	1896	
10	東京人類学会雑誌／11 巻一 125 号	明治 29 年 8 月	1896	
11	東京人類学会雑誌／11 巻一 126 号	明治 29 年 9 月	1896	
12	東京人類学会雑誌／12 巻一 127 号	明治 29 年 10 月	1896	
13	東京人類学会雑誌／12 巻一 128 号	明治 29 年 11 月	1896	
14	東京人類学会雑誌／12 巻一 129 号	明治 29 年 12 月	1896	
15	東京人類学会雑誌／12 巻一 130 号	明治 30 年 1 月	1897	
16	東京人類学会雑誌／12 巻一 131 号	明治 30 年 2 月	1897	
17	東京人類学会雑誌／12 巻一 132 号	明治 30 年 3 月	1897	
18	東京人類学会雑誌／12 巻一 133 号	明治 30 年 4 月	1897	
19	東京人類学会雑誌／12 巻一 134 号	明治 30 年 5 月	1897	
20	東京人類学会雑誌／12 巻一 135 号	明治 30 年 6 月	1897	
21	東京人類学会雑誌／12 巻一 136 号	明治 30 年 7 月	1897	
22	東京人類学会雑誌／12 巻一 137 号	明治 30 年 8 月	1897	
23	東京人類学会雑誌／12 巻一 138 号	明治 30 年 9 月	1897	
24	東京人類学会雑誌／13 巻一 139 号	明治 30 年 10 月	1897	
25	東京人類学会雑誌／13 巻一 140 号	明治 30 年 11 月	1897	
26	東京人類学会雑誌／13 巻一 141 号	明治 30 年 12 月	1897	
27	東京人類学会雑誌／13 巻一 142 号	明治 31 年 1 月	1898	
28	東京人類学会雑誌／13 巻一 143 号	明治 31 年 2 月	1898	
29	東京人類学会雑誌／13 巻一 144 号	明治 31 年 3 月	1898	
30	東京人類学会雑誌／13 巻一 145 号	明治 31 年 4 月	1898	
31	東京人類学会雑誌／13 巻一 146 号	明治 31 年 5 月	1898	
32	東京人類学会雑誌／13 巻一 147 号	明治 31 年 6 月	1898	
33	東京人類学会雑誌／13 巻一 148 号	明治 31 年 7 月	1898	
34	東京人類学会雑誌／13 巻一 149 号	明治 31 年 8 月	1898	
35	東京人類学会雑誌／13 巻一 150 号	明治 31 年 9 月	1898	
36	東京人類学会雑誌／14 巻一 151 号	明治 31 年 10 月	1898	
37	東京人類学会雑誌／14 巻一 152 号	明治 31 年 11 月	1898	
38	東京人類学会雑誌／14 巻一 153 号	明治 31 年 12 月	1898	
39	東京人類学会雑誌／14 巻一 154 号	明治 32 年 1 月	1898	
40	東京人類学会雑誌／14 巻一 155 号	明治 32 年 2 月	1899	
41	東京人類学会雑誌／14 巻一 156 号	明治 32 年 3 月	1899	
42	東京人類学会雑誌／14 巻一 157 号	明治 32 年 4 月	1899	
43	東京人類学会雑誌／14 巻一 158 号	明治 32 年 5 月	1899	
44	東京人類学会雑誌／14 巻一 159 号	明治 32 年 6 月	1899	
45	東京人類学会雑誌／14 巻一 160 号	明治 32 年 7 月	1899	
46	東京人類学会雑誌／14 巻一 161 号	明治 32 年 8 月	1899	
47	東京人類学会雑誌／17 巻一 196 号	明治 35 年 7 月	1902	
48	東京人類学会雑誌／17 巻一 198 号	明治 35 年 9 月	1902	
49	東京人類学会雑誌附録／139 号	明治 30 年 10 月	1897	明治30年会員名簿
50	東京人類学会雑誌附録／151 号	明治 31 年 10 月	1898	明治31年会員名簿
51	東京人類学会雑誌附録／152 号	明治 31 年 11 月	1898	139号～150号索引目録
52	東京人類学会雑誌附録／175 号	明治 33 年 10 月	1900	明治33年会員名簿

(10) 熊沢瞭静については、東奥日報社編『青森県人名大事典』(1969年)、さらに、同家に保管されていた東京都民新聞社編『自治団体之沿革』(1930年)にも掲載されている。ちなみに瞭静の三女ときは声楽家竹本光江である。

(11) 村越潔 2007年『青森県の考古学史—先覚者の足跡を尋ねて—』29頁、昭和3年(1928)に結成した保存会では、その目的を「山形村先住民族ノ遺物タル土器石器及石棺等ノ保存」とし、入会するためには、遺物を1点以上保存のために会に預けることと定められていたという。退会時には返還することになっていた。

(12) 前掲『青森県人名大事典』(225頁)、田澤正 2016『昔の津軽を歩く—下澤保躬うた詠み紀行』北方新社(60頁)によると、この立て札により、蓑虫の他数十人が訪ねてきたので宿泊させもてなしたという。

(13) 白雲山荘主人「隠れたる勤王画家 蓑虫山人傳」(『月刊東奥』2巻7号、1940年)。白雲山荘主人は、東奥日報社黒石支局長を務めた工藤親作のこと。黒石地域中心に蓑虫の足跡を追い、関係者に取材し自身でも作品を収集していたという(成田彦栄「先史考古覚え書き三」、当館2012年図録『寄贈記念 成田彦栄コレクション選』20頁の彦栄氏年譜中に記載がある)。また、『東奥日報百年史』(622頁、1988年)に同社黒石市局長として工藤親作の名がある。

(14) 『鶴田町誌下巻』(869頁、1979年)によると、亀寿院のことで、はじめ禅宗。戦後は浄土宗となった。

(15) 小川破笠(おがわ・はりつ、1663~1747年)は、俳諧・絵画・漆工芸等で才能を発揮した江戸期の芸術家。弘前藩お抱えとして支援をうけて制作した。出自は明らかではない。細工的工芸品は「笠翁(りつおう)細工」「破笠細工」と呼ばれた(『青森県史 文化財編 美術工芸』110~111頁、164~169頁、2010年)。

(16) 三上強二氏は「蓑虫山人の業績と作品」(1984年展図録)で、太田三郎氏が「土岐蓑蟲伝」(『郷土文化』第4巻2号、1940年)本文中で紹介している金銭借用に関する文書をもとに蓑虫の来県目的に破笠作品収集の一つとあげているが、これまでこのことを知る具体的な資料がなかったが、本稿で紹介する書簡で蓑虫自身が熊沢家に預け、今回の「古物展覧会」で展示に加えるべきものとして述べている点は、県内でのその収集を示す貴重な情報を提供するものである。

(17) 荒井経『日本画と材料』116頁、武蔵野美術大学出版局、2015年

(18) 三上強二(前掲(16))

(19) 静輝は「しずてる」と読むか。君山は号。明治~昭和期の漢学者に藤野君山がいる(『和漢詩歌作家辞典』915頁、みづほ出版、1972年)。

(20) 青森市有形文化財「石器土器図絵六曲屏風」、「石器図絵屏風・土器図絵屏風」(いずれも個人所蔵)の内容については、藤沼邦彦氏らが検討し考察した報告がある(藤沼邦彦・深見嶺・工藤清泰「蓑虫山人の『陸奥全国神代石古陶之図』と青森新聞の『第二回弘前博覧会縦覧の記』について」『亀ヶ岡文化雑考集弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告7』、2008年)。



神代石之図 六



神代石之図 五



神代石之図 四



古陶之図 六



古陶之図 五



古陶之図 四

青湾の景「津軽半島海岸風景図」

紙本彩色、卷子本。各図寸法は縦31cm、横は図によって異なり各58~64cm。横全長は2760cm。本図は横178cm。





神代石之図 三



神代石之図 二



神代石之図 一

陸奥全国神代石之図 屏風

縦 173 cm、横 375 cm

(各図 縦 149.5 cm、横 49.0 cm)



古陶之図 三



古陶之図 二



古陶之図 一

陸奥全国古陶之図 屏風

縦 173 cm、横 375 cm

(各図 縦 149.5 cm、横 49.0 cm)



陸奥全国神代石之図屏風、陸奥全国古陶之図屏風に描かれている遺物、所蔵者の記載

		描かれている遺物	所蔵者についての記載
1	古陶之図・一	香炉形土器	佐藤部氏蔵
2	古陶之図・一	壺形土器	枝川村工藤氏所蔵荒谷山中所獲
3	古陶之図・一	鉢形土器	亀ヶ岡村野呂氏所蔵
4	古陶之図・一	壺形土器	弘前市都賀氏所蔵
5	古陶之図・一	台付鉢形土器	青森浅田氏蔵
6	古陶之図・一	円筒土器	蓑虫山人蔵
7	古陶之図・一	浅鉢形土器	弘前佐藤部氏蔵
8	古陶之図・一	浅鉢形土器	館岡村前田氏蔵
9	古陶之図・一	蓋付壺形土器	弘前佐藤氏蔵
10	古陶之図・二	大型壺形土器	西津軽郡猫淵村 山中所獲 蓑虫蔵
11	古陶之図・二	土偶頭部	亀ヶ岡所獲 蓑〔虫〕蔵
12	古陶之図・二	壺形土器	蓑虫山人蔵
13	古陶之図・二	鉢形土器	蓑虫蔵
14	古陶之図・二	壺形土器	蓑虫蔵
15	古陶之図・二	壺形土器	蓑虫蔵
16	古陶之図・二	片口鉢形土器	所獲蓑虫蔵
17	古陶之図・三	鉢形土器	木造村松木氏所蔵
18	古陶之図・三	甕形土器	北津軽相内村庄司氏蔵 同村山中所獲
19	古陶之図・三	甕形土器	亀ヶ岡野呂氏所蔵
20	古陶之図・三	甕形土器	弘前都賀氏蔵
21	古陶之図・三	円筒土器	弘前神氏所蔵亀ヶ丘所獲也
22	古陶之図・三	鉢形土器	青森浅田氏蔵
23	古陶之図・三	注口土器	枝川村工藤氏所蔵 下山形村田中所獲
24	古陶之図・三	鉢形土器	青森浅田氏蔵
25	古陶之図・三	鉢形土器	浪岡村玄徳寺蔵
26	古陶之図・四	広口壺形土器	下山形村熊澤氏所蔵
27	古陶之図・四	鉢形土器	弘前大道寺所蔵
28	古陶之図・四	甕形土器	北中野村屏風館跡 所獲同村天皇社蔵
29	古陶之図・四	広口壺形土器	木造松木氏蔵
30	古陶之図・四	鉢形土器	弘前都賀氏蔵
31	古陶之図・四	壺形土器	館岡村野呂氏蔵
32	古陶之図・四	注口土器	斗南小川涉蔵
33	古陶之図・五	広口壺形土器	波岡古城所獲 蓑虫山人蔵
34	古陶之図・五	鉢形土器	亀ヶ丘所獲蓑虫山人蔵
35	古陶之図・五	鉢形土器	蓑虫蔵
36	古陶之図・五	甕形土器	蓑虫蔵
37	古陶之図・五	長頸壺形土器	蓑蔵
38	古陶之図・五	鉢形土器	蓑虫蔵
39	古陶之図・五	鉢形土器	東津軽郡造道村 館野所獲蓑虫蔵
40	古陶之図・五	鉢形土器	蓑山人蔵
41	古陶之図・五	鉢形土器	蓑虫蔵
42	古陶之図・五	鉢形土器	蓑虫蔵
43	古陶之図・五	鉢形土器	東中野三瀧神社境内所獲蓑虫蔵
44	古陶之図・六	鉢形土器	黒石浅川氏蔵
45	古陶之図・六	甕形土器	下北郡大畑八幡宮蔵
46	古陶之図・六	土偶	亀ヶ丘所獲館ノ越村 北畠氏蔵
47	古陶之図・六	土偶	佐藤部氏蔵
48	古陶之図・六	片口付鉢形土器	弘前同氏所蔵 亀ヶ丘所獲
49	古陶之図・六	土偶	蓑虫蔵
50	古陶之図・六	注口土器	蓑虫山人蔵
51	古陶之図・六	長頸壺形土器	木造松木氏蔵
52	古陶之図・六	甕形土器	西津軽郡追良瀬村山中所獲 同村長谷彦三郎氏蔵

		描かれている遺物	所蔵者についての記載
1	神代石之図・一	環状石斧	下北郡佐井村所獲蓑蔵
2	神代石之図・一	石棒	弘前神氏蔵
3	神代石之図・一	石棒	波岡村阿部文助蔵
4	神代石之図・一	石棒	本口村村松二郎氏蔵
5	神代石之図・一	独鈷石	南津軽郡相澤村々社蔵
6	神代石之図・一	独鈷石	青森浅田氏蔵
7	神代石之図・一	石棒	弘前岡本氏蔵
8	神代石之図・二	石棒	中津軽郡下湯口村岡本氏蔵
9	神代石之図・二	石棒	青森造道
10	神代石之図・二	石皿	南津軽郡下山形村熊澤氏蔵
11	神代石之図・二	獅子頭	北中野村屏風館跡
12	神代石之図・二	石皿	西津軽湯舟村
13	神代石之図・二	石冠	中津軽郡十腰内村蔵鬼山神社蔵
14	神代石之図・三	蔵手刀	弘前懸社熊野宮神宝
15	神代石之図・三	石棒	下北郡河内村所獲蓑蔵
16	神代石之図・三	勾玉	土岐蓑虫蔵曲玉
17	神代石之図・三	石剣	弘前佐藤氏蔵
18	神代石之図・三	蔵手刀	高杉村加茂宮神宝
19	神代石之図・三	独鈷石	弘前龜仙翁蔵
20	神代石之図・三	天の岩笛	深浦円覚寺蔵天岩笛
21	神代石之図・三	鏝	浪岡阿部氏蔵
22	神代石之図・三	石皿	北津軽郡富岡村所獲蓑蔵
23	神代石之図・三	石皿	弘前長利氏蔵
24	神代石之図・三	石帯	相野村所獲蓑虫蔵
25	神代石之図・三	石棒	深浦円覚寺所有石剣
26	神代石之図・三	独鈷石	尾崎山中所獲土岐蓑虫蔵
27	神代石之図・四	勾玉	下北郡佐井村矢ノ根八幡宮神宝曲玉
28	神代石之図・四	石槍	矢ノ根八幡宮蔵
29	神代石之図・四	石櫃	国幣社岩木山神社聖宝石筒並蓋
30	神代石之図・四	石棒	尾崎山中所獲蓑虫蔵
31	神代石之図・四	石剣	青森浅田栄兵衛所有
32	神代石之図・四	石棒	独狐村庄三郎所蔵
33	神代石之図・四	石刀	浅田氏蔵
34	神代石之図・四	石皿	西津軽郡蓮村奥三郎所蔵
35	神代石之図・四	石棒	青森浅田氏蔵
36	神代石之図・五	石棒	五所川原市毛内氏所蔵
37	神代石之図・五	石皿	下北郡河内村徳念寺所蔵
38	神代石之図・五	石筒	南津軽郡五本松村加茂宮蔵
39	神代石之図・五	石棒	南津軽郡廣船村廣船神社蔵
40	神代石之図・五	石斧	蓑虫山人蔵
41	神代石之図・五	青龍刀形石器	種里八幡宮所蔵
42	神代石之図・五	青龍刀形石器	西津軽郡種里八幡宮所蔵
43	神代石之図・六	石筒	弘前岡本氏所蔵湯口山中所獲
44	神代石之図・六	勾玉	弘前下澤保身蔵
45	神代石之図・六	勾玉	佐藤部氏蔵
46	神代石之図・六	勾玉?	蓑虫蔵
47	神代石之図・六	独鈷形石器	佐藤部氏蔵
48	神代石之図・六	石槍	波岡村阿部氏所蔵
49	神代石之図・六	石環	追良瀬村長谷氏蔵
50	神代石之図・六	石斧	蓑虫蔵
51	神代石之図・六	石笛	種里八幡宮蔵天石笛
52	神代石之図・六	石棒	舞戸村一戸氏蔵石剣